

意欲的に関わることから表現できる生活科の授業

～人との関わりから生まれる意欲～

横瀬 文子

意欲的に関わり、表現できる生活科の学習をテーマに研究を進めてきた。生活科において、自分自身と関連づけながら学ぶ子どもを育てるためには、対象に価値があると感じさせることが必要である。

対象に価値があると感じさせるために、1学期にはまちたんけんを通して気になるお店を調べた。疑問に思ったことを調べることで、自分事として価値を見出してきた。2学期には、和歌山城のおもてなし忍者を調べた。おもてなし忍者に話をしたり、質問したりするうちに、おもてなし忍者と仲良くなり、好きになっていった。そうすることで、おもてなし忍者についての多くの気づきが生まれ、意欲的に対象と関わることができた。こうした意欲的な関わりにより、多彩な表現に繋げることができた。

キーワード：表現活動、気づき、まちたんけん、人との関わり、対象への価値

1. 研究目的

本年度の学校提案「問い続け、学び続ける子どもたち」を受け、生活科部では、「表現活動から気づきの質を高める生活科の学習」をテーマに、子どもたちが表現活動を通して多くの気づきを生むことができる学びを研究の柱にした。

生活科では、他教科に比べ、直接体験を重視した学習活動を行うことや、地域や自分の生活に関する学習活動を行うことができる。体験や学習活動を通して、子どもたちが、学習の中に自分なりの価値を見出す過程を大切にしていくことが重要であると考え。対象に価値があると感じさせるためには、子どもたちが何に興味を示し、何に驚き、何を必要としているのかなどをみとり、学ぶ価値に近づける工夫をする必要がある。また、新たな気づきを生み出すためには、表現活動を充実させ、自らの気づきを自覚したり、友達の気づきに触れ、新たな気づきや疑問をもったりすることが大切だ。こうすることで、自分なりの価値があると感じることができるのではないかと考える。

つまり、意欲的に取り組み、表現することで、自分なりの価値を見出すことができるのではないかと考える。そのために、意欲的に関わりたいと思える単元の設定や支援を充実させたい。

2. 研究方法

「もっと知りたいな町のこと～和歌山城を支えている人々～」

本校近くの和歌山城にいる「忍者」を取り上げ、学習を進めていった。和歌山城の忍者は「おもてなし忍者」と呼ばれ、車椅子の乗る人が安心して登城できるようサポートしたり、隠れ身の術などの演技をして訪

れた人々を楽しませたりと和歌山城を盛り上げることに一役買っている。子どもたちは、そんな忍者にインタビューをしたり、仕事の様子を見せてもらったりすることで、多くの気づきが生まれる。

小学校学習指導要領解説生活編には、「生活科の学習は、児童が自分とのかかわりの中で、身近な人々、社会及び自然に直接働きかけ、また働き返されるという双方向性のある活動をめぐって展開される」とある。おもてなし忍者との交流により、多くの気づきが生まれ、意欲的な関わりができる。

2. 1. 題材の出合わせ方

子どもたちが学習意欲を持続けるために、事前に教師が教材化しやすい場所を調べておくことが、重要であると考え。教師は、和歌山市役所で和歌山城のおもてなし忍者についての事業計画、来客状況などを、調べたり、実際におもてなし忍者をしている人に話をきいておいたりした。こうすることで、子どもたちにこの題材でどういう出合わせ方をさせたいかについて予め考えることができ、意欲的な関わりができるのではないかと考える。

2. 2. 一人一人の表現物へのみとり

子どもたちの思いや願い、感じたことを日頃のつぶやきや活動の様子だけではなく、ワークシートや絵などの表出物からみとることを大切にする。こうすることで、発言が少ない子も含め一人一人の考えをみとることができる。それぞれの共通する考え、違う考えを見つけておくことで、全体で共有したときに、意欲的な関わりができるように生かすことができるのではないかと考える。

2. 3. 表現活動の充実

言葉や絵、動作、劇化などの多様な方法で、相手に伝わりやすいものを考えることを大切にする。さまざまな表現方法に触れ、子ども同士で見合うことにより、自分に合った表現方法を考えることができる。また、小学校学習指導要領解説生活編にも「言葉や絵、動作、劇化などの多様な方法を使って表現することによって、生み出した気づきを自覚することにつながるからである」とある。表現することにより、体験したことを捉えなおすことができる。

3. 単元の実際

「もっと知りたいなまちのこと 和歌山城を支えている人々」

の実践より

3. 1. 単元の流れ

第1次. 和歌山城にたんけんだ

- ・和歌山城にまちたんけんに行こう (2)
- ・見つけたことを発表しよう (1)

第2次. 忍者のひみつをさぐろう

- ・忍者のことをいっぱい予想しよう (1)
- ・忍者に会いに行こう (2)
- ・分かったことを発表しよう (1)
- ・忍者に会いに行こう (2)
- ・もっと調べたいことを出し合おう (1)

第3次. 忍者のことを紹介しよう

- ・紹介することを考えよう (1)
- ・とっておき情報をまとめよう (3)
- ・紹介を出し合おう (1・・・本時)
- ・紹介する準備をしよう (2)
- ・忍者を紹介しよう (1)

第4次. 忍者に感謝の気持ちを伝えよう

- ・忍者の紹介でがんばったことを出し合おう (1)
- ・忍者にお礼状を書こう (1)

3. 2. 活動の実際

3. 2. 1. 対象に何度も触れる

「もっと知りたいな」と思うたびに、まちたんけんを繰り返していく。1回目のたんけんでは、発見したものを、ワークシートに書いた。「おもしろい葉っぱつけたよ」「和歌山城を見るのが楽しみ」「天守閣きれいだな」と言っている中、石垣にかくれみの術をしている忍者を発見した。「うわあ！かくれてる！忍者だ！」とよろこんでいた。その後、忍者と一緒にかけっこをしたり、ミストシャワーをしてもらったりと、楽しんでいた。たんけんを通して、忍者を調べていくことが決まった。



図1 ミストシャワーでおもてなしをする忍者

2回目のたんけんでは、忍者に会いに天守閣前へ行き、忍者の代表・寛助さんに話をしてもらった。そこで、グループに分かれ、自分が予想した？(はてな)、気になった？(はてな)を、忍者に質問をした。忍者にたくさん質問をしたグループ、忍者に和歌山城を案内してもらったグループ、忍者の仕事で使うスロープを教えてもらったグループなど、様々であった。忍者とたくさん話ができて、子どもたちは満足してたんけんを終えた。

3回目のたんけんでは、より細分化された？(はてな)を見つけるために、質問に行った。また、忍者の車椅子サポートの仕事を実際に見せてもらった。階段を担いでさげる忍者に子どもたちは驚いていた。子どもたちは忍者のことを名前前で呼ぶようになり、忍者となかよしになっていた。



図2 車椅子サポートをする忍者

まちたんけんを重ねることで、子どもたちは忍者に関心を持ち、忍者のわざのまねっこや忍者の発言についての話をするようになっていった。

3. 2. 2. 表現の出し合い

おもてなし忍者の仕事を1年生に紹介するため

に、本時「紹介を出し合おう」で紹介したいことを出し合った。特に人気があったのは、「かくれみのじゅつ」である。実際にかくれみのマントを作り、実演を交え、「おもてなし忍者はこうやってみんなを楽しませています。」と発表していた。そこに、別の子が「かくれみのじゅつゲーム」を発表した。みんなが目をつぶり、その間にかくれ、どこにかくれたかを当てるゲームである。子どもたちは、大変喜び参加していた。



図3 かくれみのじゅつを活用した発表

また、「車いす」の発表では、おもてなし忍者の車いすをおすスピードや、車いすの仕組みについての発表があった。その中に「お客さんのことを思って」という発言があり、おもてなし忍者のお客さんを安心させてあげたいという思いが表れていた。

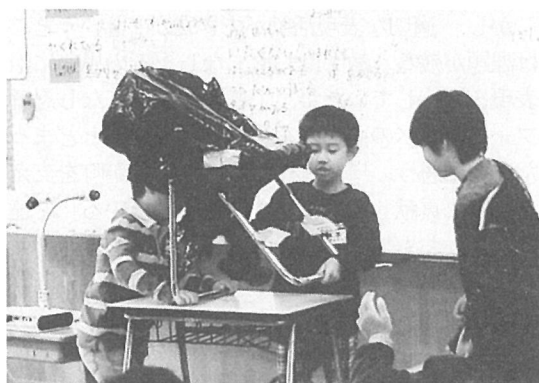


図4 車椅子サポートの発表

3. 2. 3. 他者を意識した表現へ

自分が紹介したいことについてグループに分かれ、1年生に紹介する準備をした。本時「紹介を出し合おう」で出きた表現の方法を、次時「紹介する準備をしよう」では互いに取り入れながら、紹介を考えていった。また、紹介をする前には、リハーサルをし、他の

グループにも意見をもらった。

刀による演舞を紹介するグループは、最初、刀を作ることばかりこだわり、まとまりのないままだった。すると、グループ内のつかさが、「ぼくが説明をするから、ぼくの合図でみんなが集まってな」とメンバーに話をした。こうして、グループの紹介は、劇のようなまとまりが出て、1年生に伝わりやすいものとなった。



図5 刀の演舞についての発表

出会った忍者について、発表するグループは、忍者の似顔絵を丁寧に描いていた。リハーサルでは、その絵を見せながら、「この忍者は、〇〇という名前です。この忍者は、△△という名前です。・・・」という紹介だった。しかし、他グループから、「時間が短くて1年生は分からないかもしれないよ」「忍者の特徴を話してみたら？」というアドバイスももらった。そうすることで、名前だけの紹介だったグループが、それぞれの忍者の特徴について、本番では紹介することができた。



図6 出会った忍者についての発表

4. 授業の考察

4. 1. 意欲的な姿

おもてなし忍者とのふれ合いにより、子どもたちは忍者にとっても興味をもった。忍者の刀や手裏剣を触らせてもらったり、忍者といっしょにかけっこをしたりと、忍者のことが大好きになっていった。第1次のまちたんけん後のふり返りでは、

にんじゃがいてて、シャワーをかけてくれました。はしりがはやいです。もっと知りたいです。にんじゃは3人ぐらいいてたけど、みんながいるところは140人ぐらいいてるのかな。(ななか)

「もっと知りたいです」には、ななかがおもてなし忍者との関わりに意欲的になっているといえる。また、「(忍者が)140人ぐらいいてるのかな」というななかの予想は、第2次への意欲になる。小学校学習指導要領解説生活編に「自分とのかかわりに関心をもつ」ということは、外部の環境からの刺激に対してただ表面的に反応するだけではなく、それが自分にとって価値があると実感し、それへ積極的に向かっていくことである。」とある。おもてなし忍者が特別で優しい存在であることが、関心をもつことに繋がったのではないかと考える。

また、第3次の紹介に向けての準備では、授業以外に休憩時間や家でも表現物を作ったり、練習をしたりする姿がみられた。



図7 授業時間外に制作したものを使って

4. 2. 表現活動から生まれる思い

忍者のパフォーマンスにおける表現が多く、表現を楽しむことができていた。中でも、「かくれみのじゅつ」をビニール袋で表現する子が多かった。本時「忍者の紹介を出し合おう」の準備期間に、この表現物を使っている子が多く、それに人気が高まっていた。このことから、友達の表現物を見て、自分にふさわしい表現を考えることができたように思う。一方で、それはまねでしかなく、自分なりの表現をもっと追求できたのではないかと考えることもできる。

みきは、「かくれみのじゅつのマントに、かべの写真をはりたい」と言っていた。多くの子が使っているビニール袋に、マントが壁と同化されているように見えるために、写真を貼りたいという考えである。結局、写真を撮ったが、うまく撮影できなかったことや、発表までの時間がなかったことにより、この考えは断念することになった。しかし、みきの言葉は、友達の表現に触れながら、自分なりに表現方法を見つけ、実践しようとする意欲的な姿だ。こういった発想を大切にしていくことが必要だったのではないかと考える。

また、かくれみのじゅつでかくれんぼのようなゲームにして表現するグループがあった。しかし、おもてなし忍者は、そういうゲームをしてはいない。おもてなし忍者の「楽しませる」から派生して自分で考えたのであろう。一見関係のない発表にも思えるが、おもてなし忍者の「お客さんへの思い」に寄り添ったオリジナリティあふれる発表であるように思った。

4. 3. 友達との関わり

紹介を考える中で、友達との関わりがたくさんあった。この関わりによって、よりよい表現へ向かうことができたのではないかと考える。これも、全員で同じ「おもてなし忍者」にふれ、紹介する前に共有することができたからではないかと考える。

5. 成果と課題

単元全体を通して、子どもたちは、意欲的におもてなし忍者と関わることができ、そこから多様な表現ができたのではないと思う。人との関わりにより、多くの気づきが生まれ、表現へと繋げることができた。

しかし、「適切な表現活動ができたか」というところには課題が残る。教師はおもてなし忍者の思いに沿った表現を期待していたが、子どもはおもてなし忍者のパフォーマンスの面白さを重視した表現にとどまっていたように思う。単元目標である「忍者が町を支えていることに貢献していることに気づいている」を達成する上で、おもてなし忍者の思いや願いを全体で共有する時間をもう少しとるべきだったと考える。「活動あって学びなし」にならないよう、表現活動の在り方について、今後検討したい。

参考文献

池野悟(2010)「生活科実践事例集」小学館
鹿毛雅治・清水一豊(2009)「平成20年版小学校新学習指導要領ポイントと授業づくり 生活」東洋館
文部科学省(2008)「小学校学習指導要領解説 生活編」